



安心できる介護・納得できる介護保険・信頼できる制度の実現

NPO 法人 きょうと介護保険にかかわる会

発行人 梶 宏

事務所 〒604-8811 京都市中京区壬生賀陽御所町3-20 賀陽コーポラス 809

TEL・FAX:075-821-0688 E-mail:npokakawarukai@helen.ocn.ne.jp

<https://npokaigo.or.jp/>**三題噺「総選挙・米大統領選・ケアラー支援条例」****理事長 梶 宏**

このたびの総選挙では、安倍一強政治の弊害に国民が気づいた。裏金問題で悪質だと思われる東京の某氏に対し、京都出身でかつ立命館で学んだA参議院議員が刺客として挑戦し、某氏も冷汗を流しただろうが、地元出身でもあるだけにA氏に追い落とされることはなかった。それ以外には、私も大きな不満を持つことがなかった。私が住む選挙区では、義に感じて与党に対し異議申し立ての気持ちからか、大学でも職域でも後輩である、まじめでおとなしい人が立候補した。勝ち負けにこだわらぬこの人の純粋さには驚いた。口だけで行動が伴わなかった自分が恥ずかしかった。

次はアメリカのトランプ大統領再登場である。こういう人がアメリカの大統領？という気持ちになる私はおかしいのだろうか？

願わくば「強いアメリカ」の印象をバックに、ロシア大統領と平和についての外交を演じてもらいたいが、甘い期待と笑われそうな気がする。ただ4年経ったあと、「この人がまた」ということがないだけに、何かわからないが期待しておこう。ユーモラスな動作を示すところも独裁国の指導者と違っている。

その次は京都の話だ。11月6日、私は久しぶ

りに市会傍聴席の正面に身を置いた。演壇には、全議員を代表して自民党の寺田一博議員が立ち、条例案を提案した。条例の名は略して「京都市ケアラー支援条例」。ケアについて「家族が担うべきという認識は根強く残っている」との指摘が示され、基本理念としてまず個々の人々の意向を尊重することが明記された。前文は40字×36行という長さである。長けりゃいいというものではないが、京都市では当事者や家族の会が「ケア」を合言葉にして経験を学び合う市民文化をはぐくんできたことを評価し、だれもが「自己実現」を図ることができるように、と謳っている。

提案に対し、それを聞く松井市長のしばしば頷いている様子が正面で見つめる私の目に焼き付いた。パブリックコメントが400近くあったことも異例の出来事。京都新聞は「市民運動から誕生」という見出しもつけて大きく報道してくれた。2段×幅13センチの写真には、やや長い条例の正式名称と「全議員共同提案」を明記した横断幕とともに市民と議長以下関係議員が並ぶという異例の扱いも公表された。提案以前に市民と議員によるプロジェクトチームが対話を進めたことも異例だった。

目次

三題噺「総選挙・米大統領選・ケアラー支援条例」	1
「京都市ケアラー支援条例」の制定・施行にあたって(御礼)	2
10月研修会報告「養護老人ホームの役割について」	3
11月研修会報告「訪問介護の現状とこれから」	4～5
市民ネットワークと京都市との意見交換会報告	6
シリーズ「私の介護体験」/1月&2月研修会案内	7
会員リレーえっせい/シルバー川柳/新入会員紹介/編集後記	8

「京都市ケアラー支援条例」の制定・施行にあたって(御礼)

京都ケアラーネット 津止正敏

11月6日の京都市本会議において、「全議員の共同提案」による「京都市ケアラーに対する支援の推進に関する条例」が制定され、11日の「介護の日」に施行されました。京都ケアラーネットでは、これを祝って11月23日、「これから始まる『ケアラー支援』」と題する公開学習会を開催しました。

この学習会では、ケアラー支援条例制定プロジェクトチーム座長の寺田一博議員はじめメンバー全員(5人)が出席し、条例制定に至る思いを語ってくれました。この学習会に堀越栄子さん(日本ケアラー連盟代表理事)が東京から、ごうまなみさん(長崎県議会議員)が長崎から、地元京都からは同志社大学名誉教授の新川達郎さんが、お祝いのエールを届けに駆けつけてくれました。杉並区の岸本聡子区長からもオンラインでメッセージをいただきました。

50名を超えた会場参加者からは、「ケアラーという言葉にはまだ馴染めないが『ケアして当たり前』の家族にもやっと光があたった。条例が出来てもたらい回しにされる実態は変わるのだろうか。親亡き後の息子のことを想うと死ぬに死ねない」等、この条例への期待と不安の入り混じる発言もありました。

この日、私に割り振られた役割は、制定施行された京都市ケアラー支援条例の「特徴とこれからの課題」の報告。ケアラー当事者・支援者の視点・立場から、①制定プロセス、

②「前文」構成、③本則「条文」の3点に渡ってその特徴を指摘しました。ここでは①・②についてだけ簡単に触れておきます。

制定のプロセスで特筆すべきは、何といても京都市会が「全議員の共同提案」による条例制定という英断を下し、私たち当事者・市民との「協働・連携」によって条例が実現したこと。また1,349字という異例の長文となった「前文」も特徴的です。ケアラーは疲労困憊し困っているから支援が必要だということだけでなく、社会を支える不可欠な営みとしてケアの特段の意義を確認し、それゆえのケアラー支援だという根源的な支援根拠を記しています。全国に誇りうる京都のケアとケアラーの歴史を記し、すべてのケアラーが安心して希望を持って自分らしく生きられる社会実現をめざすという未来志向の前文。京都の名を伏しても誰もが「京都」だと分かる前文となりました。これは決して自賛でも過言でもないと思います。

条例は制定しましたが、しかしこれは第1歩、実効性ある条例に育てようと確認し、閉会となりました。

「かかわる会」の皆様のこれまでの格別のご支援に心から御礼申し上げます。



京都市ホームページより

養護老人ホームの役割について

～社会的弱者のセーフティネットとして～

第138回
研修
報告

日時：10月19日(土) 13:30~16:30
会場：ひと・まち交流館 京都 3階 第5会議室
講師：尾松 裕之さん
(宇治明星園養護老人ホーム園長)
参加者： 23 名



高齢者介護を衆議院選挙の争点にという理事長のあいさつの後、研修会が始まりました。

養護老人ホームとは

養護老人ホームは入所資格が「経済または環境の理由で自活できない身寄りのない65歳以上」という、老人福祉法に基づく介護保険法外の施設です。市町村の判断で、入所が措置として決定します。運営費用は自治体から支出され、入所者は収入により入所費用(0円~約10万円)を自治体に支払い、入居者の手には月2、3万円自由になるお金が残り貯金する人もいます。決して収容されているわけではありません。

全国に921施設、京都府17施設、内京都市9施設のみで、唯一、増加していない高齢者施設です。今も無年金者、8050問題などのセーフティネットともなっています。

宇治明星園養護老人ホーム

宇治明星園養護老人ホームは、昭和50(1975)年府内最後の施設として設立され、改築を機に全館個室となりました。職員数は17名(介護職員10、看護師2、生活相談員1、園長・事務員等4)。現在、定員50人、現員43人です。

入所者の特徴(府内17施設アンケートから)

入所者の入所理由は独居困難27%、要介護者19%、認知症・精神障害18%、経済困窮8%、身体障害7%、虐待7%、住宅立ち退き4%などです。要介護度は自立が40%、要支援から要介護5まで大きくばらつき、平均介護度1.32。一般型特定施設に指定され介護施設化してきました。退所理由は死亡65%、入院14%、他施設14%、在宅復帰7%です。

措置抑制について

2006年地方交付税改定により、施設運営費(措置費)に関する国の予算が項目指定なく自治体に交付されるようになったため、全国的に措置が抑制がされてます。宇治市でも市長交代後、新規の措置がほぼありません。なお京都市は、市内のホームはほぼ定員が埋まり、本施設を含む市外の施設にも市内の対象者が入所しています。また、入所資格がありながら措置されなかった人の多くはサ高住を含む介護施設の利用を促されます。

養護老人ホームは特別養護老人ホームと混同する人も多く、介護保険実施以後、影がうすくなりました。しかし社会のセーフティネットとしての役割は、介護保険制度の穴を塞ぐものとして軽視できません。その施設内の生活が、「月2~3万円の自由になるお金」に象徴される人間的なものであることにホッとさせられます。反面、財政についての誤解?から自治体が措置をせず、対象者が結果的に貧困ビジネス等に繋げられるという現状は介護保険に過大な負担を強い、マイナスが多いと思いました。
(梶政彦 記)



訪問介護の現状とこれから

～住み慣れた我が家で過ごすことが保障される社会を～

第139回
研修会
報告

日時：11月23日（土） 13:30～16:30
会場：ひと・まち交流館 京都 3階 第5会議室
講師：高橋 弘江さん
（株式会社銭形 取締役営業本部長）
参加者： 28 名



訪問介護の現状はとてもきびしい状況ですが、高橋さんのなさってきたことは、そんな中において会社を成長させてきた模範例の一つだと思いました。

「銭形」社名の由来

「銭形」という少し変わった社名の由来は1996年、創業者上野初子さんの自宅でミニ宅老所を始めたころ、皆で「銭形平次」を見ていたからとのことでした。銭形平次にあやかってこれからの高齢化社会に新たな一石(銭)を投じる会社にしようとの思いを込めてつけられました。“銭形”と聞けばお年寄りでも親しんでいたのではという期待もあったようです。今は社員みんなが社名「銭形」を誇らしく思っていると話されていたのが印象的でした。

高橋さんは京都大学医療技術短期大学部在学中から仕事にのめり込み、学業を全うできなかったと自戒の弁がありました。銭形へは人の紹介で入られたのがキッカケとのことでした。

訪問介護事業所の倒産・廃業は過去最多

次のような例がありました。ある訪問介護事業所の経営者が事務所で孤独死しました。他の6名は全員パートヘルパーで事務処理がわからず、親族の方も困り果てていました。正式に依頼を受けた高橋さんは事業所救済チームを発足させました。2か月ほどをかけ、請求事務・スタッフシフト管理・利用者引継ぎ・廃止届ほかを済ませました。なんと、これらすべてが無報酬です。

しかし、良いこともあったそうです。救済チームの解散後、ヘルパーさん2名が銭形で働く

ことになり、今も活躍中だそうです。

会社を伸ばすには人材確保が大切

新人採用は難しく、人づての紹介の方が手堅い。次に紹介会社からですが、業者とエージェントを選ぶことがとても大事とのことでした。信頼できるエージェントからは会社に合った方を紹介していただけます。

しかし何より大切なのは「やりがい」や「醍醐味」を感じる仕事の体験を通じ、「心底楽しい仕事」であることを知ってもらうことです。社員120名からアンケートを取りヘルパーの醍醐味について聞いた次の回答(一部抜粋)からも浸透度がみてとれます。

- ・より良い生活を送る為のお手伝いができる事。それによって喜んで頂けること
- ・1対1で、その方だけのために時間を使える
- ・どういう言い方で動いてもらうか、どういう聞き方で情報をひきだすか学べる
- ・こんな自分でも利用者様のお役にたっているんだな～と実感できる
- ・他人の家に上がり、お仕事するのは信頼関係がないと出来ない仕事です等



順調に伸び、成功している事例に

高橋さん曰く、お金儲けをしたいわけではなく、会社がつぶれないために大きくしてきたことを強調されていました。今は銭形グループとして多くの事業所を展開されています。「うちの社員で訪問したとき靴をそろえずに上る者はいません！」

（社員教育は徹底していますと暗に言っておられ、頼もしい限りです）

「私は主に、北区に昨年開業した「銭形 N」に居ます」

（南に「銭形 S」、東に「銭形 E」、西に「銭形 W」の予定でしょうか？ 頼もしい！）

表 1

現状及び課題（要約）	対応方策（要約）
ヘルパー人材不足	事業所が行う研修体系の整備やヘルパーへの同行支援に係る経費を支援
サービス内容ややりがいを伝える機会が少ない	府県担当部局主体で職場説明会・見学会・体験会を実施する取組を推進
事業所が経営改善をするためのノウハウや人材がない	ヘルパーの仕事のやりがい・魅力を発信する広報事業を実施し、人材確保を促進

訪問介護事業への支援強化パッケージ(厚労省)

研修会後半のグループワーク

グループワークでは、厚生労働省老健局が今年9月12日の社会保障審議会介護給付費分科会に出した「訪問介護事業への支援について（報告）」で、本当に課題改善できるのか？というテーマで意見交換しました。その報告書の5ページ目には「訪問介護事業所への支援強化パッケージ」として表1の内容が掲載されています。

すでに高橋さんをはじめ銭形グループではヘルパー不足への対応策を実践し、成果もあげてこられました。しかし業界全体としては小規模事業所が多く、改善の見通しすらたてられない状況なのです。（小中敬三 記）

参加者アンケートより

○訪問介護の仕事の魅力をどんどん発信して行って下さい。胸をはって「ヘルパーやっています」と皆が言えるように。

○現場の方のお話は実感がありました。会社としての在り方に興味を持ちました。グループの話し合いでは「私たちに何ができるか」という視点がおもしろく、これからも同じ視点で話し合いができればと思います。

○知らないことがたくさんあって、とても勉強になった。

○グループワークで有償ボランティアメンバー、ヘルパーGH/ユニットケア職員、ケアマネ経験者の方々の話を伺うことができた。最近、色々な方の参加が増えたのでグループワークでの話し合いが楽しくなってきました。

○介護保険制度の後退、訪問介護の法改正など、現場や暮らしを考えているとは思えず残念です。

○本日の研修会は意見交換ができて、とても良かったです。

○講演テーマがとてもインパクトがあった。事例が良かった。80歳代を超えた人達との会話が生き生きとして訴えるものがあった。また「かかわる会」が京都市と話し合いを持つことで介護保険制度を良くしていこうという意欲が伝わり、学ぶところが多かった。



市民ネットワークと京都市との意見交換会報告

～介護現場の声を政策に反映するために～

当会が所属する「よりよい介護をつくる市民ネットワーク（以下、市民ネットワーク）」は2024年8月20日に京都市へ提言書を提出した。この提言書は2023年11月の「だまってたらあかん！シンポジウム」で寄せられた意見を基にまとめたものである。この提言を巡って10月30日、京都市からの回答と意見交換会が開催された。当初1時間の予定だった会議は、活発な議論により1時間半に延長され充実したものとなった。

出席者 京都市：保健福祉局健康長寿のまち・京都推進担当 八代局長他5名

市民ネットワーク：萩原、梶政彦、笠原（以上、当会）他6名



提言書に対する京都市の回答

以下に市民ネットワークが提出した主な提言と、それに対する京都市の回答を紹介する。

提言：在宅生活を支える「ヘルパーの確保策」を介護保険者の責任としての実行

（回答）介護報酬改定において、訪問介護の報酬がマイナス改定となった現状を把握している。京都市独自での改善は困難だが、国に対して介護従事者の賃金改善を強く要望している。他都市とも協力し、訪問介護員が持続可能な報酬水準となるよう取り組む。

提言：介護事業の求人活動への援助

（回答）2040年を目標に介護人材の確保・定着を進める。具体策として処遇改善、未経験者向けの研修、外国人労働者の受け入れ拡大、介護テクノロジーの活用を計画。また、悪質な職業紹介事業者への規制強化を国と連携して進めている。

提言：施策の立案に有効な調査と分析の実施



（回答）市民や介護事業所へのアンケート調査では国が定めた項目に加え、本市独自の項目を設けている。訪問介護の実態把握について要望を行う。

提言：「ケアラー支援条例」制定に向けて

（回答）市民や関係団体との意見交換を基に、実効性のある条例制定をめざす。

提言：市民協働のプラットフォームの創設

（回答）市民の命と暮らしを守るため、本市のみならず多様な関係機関と連携し、重層的な支援を進めていく必要があると認識している。今回の意見交換のような機会を活かし、新しい公共の考え方に基づいた市民協働を推進していきたい。

現場からの切実な声

意見交換会では現場からの切実な声も伝えられた。「ヘルパーとしてのやりがいはあるが、介護報酬改定の影響で限界を感じている。現場の努力が軽視されているように思う」「ヘルパーの高齢化が進み、報酬水準の低下がやりがいの喪失につながっている」と現状を指摘する意見があった。今後もこうした現場の声を市民ネットワークとして継続的に行政へ届ける必要性を痛感した。

今後の展望

今回の意見交換会は八代局長が直接参加し、市民ネットワークの意見を丁寧に聞く姿勢を示されたことから、問題解決に向けた一歩を踏み出したと言える。今後は介護現場の実態や市民の声をより具体的かつ的確に伝えることで、京都市がさらなる施策改善に取り組むことを期待している。

（笠原あけみ 記）

介護を受ける、介護をする、そのナマの声を繋ぎます

シリーズ「私の介護体験」

あ り が と う

第 2 1 回

会 員 清 水 潤



平成7(1995)年6月、私は横浜から京都の企業に単身で赴任、下鴨の実家で一人暮らしをしていた母との共同生活に入った。母は「私はもう直ぐ80歳よ!」と元気に言ったが、「自分の大事なものが盗まれる」が口癖で、多くのトラブルを起こしていた。母の友人達から「清水さんオカシイ!」のアドバイスがあり、精神科医を受診。先生から「脳の前頭葉の毛細血管に多発性梗塞が認められ、長い時間をかけ痴呆が進みます」との診断が出た。14年間に及ぶ『我が母介護』が始まった。

デイサービス、訪問介護、訪問診療と一連のサービスが始まり、私は単身赴任が終了後も京都に留まり、母の世話を続けざるを得なくなっ

た。母の認知症は徐々に進行し、自発的な行動は次第に衰えていった。

母の介護がスタートして12年目の平成20(2008)年、母は自宅で転び大腿骨骨折で入院。その後リハビリをかねた大原病院での生活が始まり、認知症は更に深く沈み込んでいった。それでも音楽には反応があり、大原の自然環境の中を母の車いすを押しながら、一緒に歌った童謡が今でも思い起こされる。

熱心なクリスチャンであった母の日常用語は「ありがとう」であったが、亡くなる最後の言葉も、我々の問いかけへの返事が「ありがとう」であった。

第 140 回
研 修 会
案 内

17時から
新年会開催!
事前申し込み
先着順

「脳トレ・ストレッチ・すこやか体操」 ～脳と体をいつまでも元気に保つために～

日 時：1月24日(金) 13:30~14:30

会 場：ひと・まち交流館 京都 3階 第5会議室

講 師：宮下さん・荒谷さん・長田さん

(長寿すこやかセンターすこやか体操インストラクター)

参加費：無料(会員交流会参加者は茶菓代300円)

会員交流会

研修会終了後、例年通り会員交流会を行います。(14:40~16:30)

おしゃべりあり、クイズあり・・・、新年のひとときをみんなで楽しみましょう。

第 141 回
研 修 会
案 内

介護保険の創設と日本社会の変化、そして未来へ

日 時：2月22日(土) 13:30~16:30

会 場：ひと・まち交流館 京都 3階 第4会議室

講 師：折坂 義雄さん (元京都市保健福祉局長、当会会員)

内 容：介護保険の創設と日本社会の変化、そして未来について考えます

参加費：一般500円 会員300円

【講師プロフィール】

折坂さんは1998年京都市民生局理事および保健局理事(兼職・介護保険準備担当)、2003年に保健福祉局長。介護保険のスタート時と第2期の責任者として活躍された。その後消防局長を経て2010年佛教大学保健医療技術学部教授。2018年退職後は行政書士、佛教大学オープンラーニングセンター講師を務められてきた。

会員リレーえっせい ⑬

高瀬 宗次



双ヶ丘中学第1回入学兼開校75周年を迎えて

今年の6月15日双ヶ丘中学の会議室を借りて会合を行いました。関東方面等には連絡をしていないので、当日は教頭先生を含めて京都在住者8名で行いました。会場に来たくても来られない方、亡くなられておられる方も多く寂しかったです。25年前の1999年4月24日の50周年には、6名の恩師と134名の同年生が花園会館に集まり楽しい会合でした。

今年、米寿で出席できた方は健康であり母校思いの人たちです。

開校の頃、学校近くに「立石電機」という町工場がありました。現在では「オムロン(株)」という世界的な会社に成長しています。入学当初の学校は校舎と教室はありましたが、机と椅子がきたのは夏休み前後でした。教室と廊下を、空瓶や嵐山からとってきた椿の実を利用して、綺麗に掃除していました。運動場はありましたが、川が真ん中を流れており水はけが悪かったのです。現在ではブルドーザー等機械で整備しますが、当時は双ヶ丘から石を運び、生徒達の手

で掘って排水路を作りました。また、嵐山から遠足をかねて砂利を持ち帰り、側溝に入れました。

2年に進級時、御室小学校の卒業生が1年に入学し、他校に通っていた3年生が転入してきました。生徒の人数も増えたので、先生方が多数赴任され、その中に男性の佐渡先生と女性の斎藤先生がいらっしゃいました。その後、お二人はご結婚され、佐渡裕さんが生まれました。安井学区と安井小学校同窓生の誇りです。

思い返せば、私の出身地区、太秦安井学区では、私達が6年生頃から「双ヶ丘中学」を建築し、安井小学校卒業生と御室小学校卒業生が通学する計画が浮上。安井小学校の先輩は「四条中学」に通学していましたので、安井学区では賛成反対の意見があり、私達の後輩も中学に通学できるということで、PTA と安井学区で賛成した記憶があります。ところが、後輩は元の四条中学に通学となり、私達だけが、双ヶ丘中学の卒業生となりました。

シルバー川柳

あの世ではお友達よと書が言い

通帳に暗証番号書いている

うす味を愛だと知った四十年

出典：(公社)全国有料老人ホーム協会

(新入会員紹介)

本山 安さん (十月)

金山 良子さん(十月) 新井 ミチ子さん(十月)

島 節子さん(十月) 高見 早苗さん(十一月)

編集後記

私の家は少し高台にあるので眺めが良いのが嬉しいのですが、いかんせん、家の前に大きな電柱があり、太い電線が何本も張り巡らされているのが邪魔で、写真を撮るときに苦労していました。方向によっては避けようがないのであきらめることも多かったのです。

ところがスマホの写真編集ツールに「消しゴムマジック」というのがあることを知って、試してみたらこれが何とも便利。消去する候補をスマホが自分で選んで教えてくれるというのも親切で、AIが働いているそうです。

電柱や電線が消去対象になるのはともかく人を写したときも邪魔な！人影を消去するよう勧めてくれます。これは怖い。自分でしっかり判断したいですね。

(M・F)

